



# 国リハニュース

国立障害者リハビリテーションセンター専門情報誌

## 目次

### 巻頭言

総長就任挨拶 ————— 2

### 特集

『東京2020オリンピック・パラリンピックを終えて』  
ゴールボール女子日本代表萩原紀佳選手インタビュー ————— 3  
装具開発を通じた聖火ランナーへの歩行支援 ————— 7

### トピックス

学生支援室における感染予防の取り組み ————— 9  
障害児の成長と発達を促す住環境整備に関する研究  
（障害児の家族向け自宅内排泄環境整備アセスメントツールの研究・開発） - 10

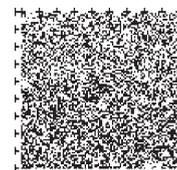


ゴールボール女子日本代表萩原紀佳選手  
銅メダル獲得報告（右は森浩一総長）

〒359-8555 埼玉県所沢市並木4-1

電話 04-2995-3100 FAX 04-2995-3661 <http://www.rehab.go.jp/>

国立障害者リハビリテーションセンター企画・情報部 企画課



## 総長就任挨拶

総長 森 浩一

令和3年4月1日付けで、飛松好子前総長の後任として国立障害者リハビリテーションセンター（以下、「センター」）総長に就任いたしました。このセンターには平成10年4月に入職しましたので、センターの42年目を迎える歴史のちょうど後半を見てきたこととなります。この間、医学の急速な進歩とともに、リハビリテーションの対象が大きく拡がり、障害を取り巻く社会情勢や福祉制度も大きく変化し、それとともにセンターも変化し続けています。

40年前は、国内でリハビリテーションを提供できる施設が数えるほどしかない状況でした。障害への対応は、医学的に障害を軽減することが中心でした。その後ICF（国際生活機能分類）がWHOで採択され、障害に対する社会（環境因子）の重要性が明確にされ、障害者権利条約が制定され、リハビリテーションは社会参加を実現するための手段の一つであり、どのような形で社会参加をするのかは障害当事者の選択に委ねられるようになり、障害者福祉サービスが「措置」から障害者の選択による契約を基本とする「支援費」に替りました。また、障害種別による差はありますが、リハビリテーションが全国的にかなり普及してきました。さらに、介護保険による支援も普及してきました。

当センターの目的は、障害のある人々の自立及び社会参加を支援することです。設立当初の当センターの役割は、身体障害のリハビリテーション施設のモデルの提示とリハビリテーション専門職の人材育成が中心でした。上述の社会・制度の変化に伴い、現在は先導的なリハビリテーションを開発・提供すること、リハビリテーションに関する情報を集約・提供して全国均沾化<sup>きんてんか</sup>を支援すること、政策に役立つ研究を行うこと等の役割が重要になってきています（国

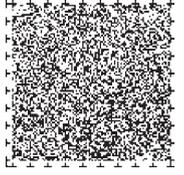
リハニュース第300号参照）。この一環として、高次脳機能障害や発達障害等の診療・研究・リハビリテーション・情報提供・全国自治体の支援拠点のサポートも行われています。また国際的には、福祉関連の国際規格策定に寄与し（例：国リハニュース第299号）、WHOの「障害の予防とリハビリテーションに関する指定研究協力センター」として、4年毎に改定される行動計画に沿って開発、啓発活動を継続して行っています（国リハニュース第367号参照）。

上記のような内・外の変化とセンターの役割の拡張に鑑み、平成30年に「国立障害者リハビリテーションセンターの今後のあり方について」検討が行われました（国リハニュース第364号参照）。この報告に基づき第3期中期目標（5か年計画）が設定され、令和2年度から遂行されています。この中期目標では、共生社会の実現に向かう時代に合った、あるいは時代を先導する、あるべきセンターの実現のために、国立の中核機関としての役割の遂行、維持、強化、更新を行い、それに必要な組織改変の計画も立て、時機を見て執行できるようにすることとしています。

第3期中期目標を達成するために、部門間の有機的な連携の強化など基本的なことを含め、いくつかの解決すべき運用上の課題があり、職員間で共有しているところです。昨年度はコロナ禍のために予期せぬ対応が多くなり、一部では計画通りの遂行が困難になりましたが、今年度は感染予防策を織り込み済みとして、計画通りの執行ができると期待しています。それ以外にも十分把握ないし対応できていない問題点も出てくるかと存じますので、皆様の忌憚ないご意見・ご指導、さらにはご協力をいただければ大変ありがたく存じます。

# ゴールボール女子日本代表 萩原紀佳選手 インタビュー

企画・情報部企画課（広報担当）



57年ぶりに東京で開催されたオリンピック・パラリンピック（7月23日～8月8日、8月24日～9月5日）。厳格な新型コロナウイルス感染防止対策の下、異例の原則無観客での開催となりましたが、多くの方がTV観戦し、熱い声援を送られたことと思います。

今回のパラリンピックでは、卒業生・修了生を始め、国リハにゆかりのある選手も多く出場し活躍しました。今回は、その中でもゴールボール女子日本代表で見事銅メダルを獲得した萩原紀佳選手にスポットを当て、インタビュー取材をさせていただきましたのでご紹介します。

萩原選手は、現在、国リハ医療教育専門課程の3年生。忙しい授業の合間を縫ってインタビューに応じてくれました。



## 《プロフィール》

萩原紀佳（はぎわら のりか）

生年月日 2001/3/3

出身地 埼玉県川口市

「網膜芽細胞腫」が原因で視覚に障害がある。高校1年生の終わりにゴールボールを始める。東京2020パラリンピックでは日本代表として、チーム最多の25得点（得点ランキング2位）を上げる活躍で、銅メダル獲得に大きく貢献した。

—パラリンピックを終えて今のお気持ちは？

メダル獲得を目指していた中で、銅メダルを獲得できたというところはすごくうれしいです。でも、決勝戦をアスリート席で見ていたときに、やはりこの舞台に立ちたかったなという思いがありました。今はまた次に向けて頑張っていきたいという気持ちです。

—7試合でチーム全33得点中25得点を上げる大活躍でした。

オフェンス型の選手として今回選出させていただいて、得点を取ることが私の役割とっていたので、その面でチームの勝ちに貢献できたのはすごくうれしいです。

—ディフェンス面でもファインプレーがありましたね。

ディフェンスはもともと苦手で、課題ではあったんですけど、一定のディフェンス力が発揮できたのがよかったなと思います。

—試合を観ていて頼もしく感じました。

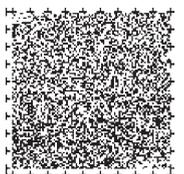
初戦のトルコ戦では、ペナルティスローによる1点しか取れませんでした。準決勝の同じトルコ戦では流れの中で3点取ることができ、大会を通じて、徐々に自分のボールに自信を持てるようになりました。戦っていて楽しかったです。

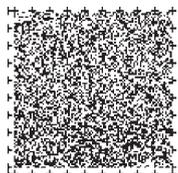
—銅メダルが決まった瞬間のお気持ちは？

十分な点差はついてはいたのですが、試合が終わるまでは、すごく落ち着かなくて（笑）。レフェリーのゲーム終了というのが聞こえた瞬間に『あっ、本当にこの舞台に立てたんだな』と思いました。昨年開催されていたら私はここにいなかったですし、こみ上げてくるものがありました。

—ご家族やまわりの方々の反応は？

家族はすごく応援してくれて





いて、横断幕とかタオルとかも作ってくれて。観客が入れば、持っていく予定だったんですけど、自宅の壁に張って応援してくれました。親戚一同大騒ぎでした(笑)。ほかにもたくさんの方々から応援メッセージや花束などをいただいていたのでうれしかったです。

—ゴールボールを始めたきっかけは？

中学まではスポーツをしていなかったのですが、高校に入ってクラスメイトにゴールボール男子の日本代表選手がいて、その子に『初心者大会があるんだけどやってみない』と誘ってもらったのがきっかけです。すぐに『楽しい、やってみなきゃ』とドハマりすることはなかったんですけど、初心者大会に向けて優勝したいという気持ちがあって、大会が終わったら次の目標ができて、続けてきて、今に至っています。誘ってくれたその友達に感謝しています。その友達が日本代表として活躍している姿を見て、私もやってみたいと思いました。

—ちなみにその初心者大会はどんな成績だったのですか？

優勝しました(笑)。先輩たちのおかげだと思いますけど。

—そういう流れもあったんですね。だんだんはまっていくといいますか…。

高校の時から国リハの練習に参加させていたでいて、ゴールボールの関係の方々が変わりにいて、人間関係に恵まれたので、今ここに来られたのかなと思います。

—初めてゴールボールをした時の感想は？

最初、デモゲームをしてくれたんですけど、すごいな、私ができるのかなと思いました。あんな速い球止められないし痛そうだなと思って。

ちょっとずつ始めたんですけど、練習していく中でできることが増えていって、これもやっ

てみたいとか、どうしたらもっと得点が入るかななどを追及したいと思うようになりました。

—幼いころはどのようなお子さんでしたか。

幼いころは人に流される子でした(笑)。あまり自分の意見を伝えられなくて。みんながこう言うならやってみようとか、みんながしないならしないとか、自分の意見は言わないタイプでした。

—ちょっと控えめな、後ろの方にいる子みたいな感じだったんですね。

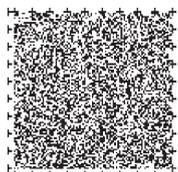
そうですね(笑)。そのあとスポーツを始めて、戦術のこととか、こっちのほうで勝てると思いますとか、そういう自分の意見を少しずつ言えるようになりました。

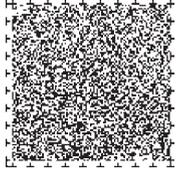
—試合中はコーチなどから指示は出せないルールと伺いましたが、投げるコースはどうやって決めているのでしょうか。

試合が始まる前に戦術として、こっちに集めてからこっちというのを決めていて、その中で途中やっぱり試合は動くので、相手の状況などは試合が止まっているときにベンチから指示が出ます。後はタイムアウトのときにこのコースを多く投げてとか、そういう指示もあります。—シュートする選手以外の選手が足音でフェイントをかける作戦がありますが、何か決めのようなものがあるのか、それともそれぞれ独自の判断でやっているのですか。

フェイクに関しては、ずっと合宿で練習してきました。音のスポーツなので投げる選手がテイクバック(後ろにボールを引く)のときに誰かが違う音を出しているとペナルティを取られてしまうんです。そのルールの中で相手を欺くといいますが、そのコンビネーションというのはすごく練習してきました。

—なるほど。タイミングがちょっとズレてしまうだけでもペナルティになってしまうんですね。





うまく決まるときは実にあざやかですよ。

—そうですね。フェイクで決まるときはすごくうれしいです。

—萩原選手の速い正確なシュート技術はどのように磨かれたのですか？

—実は、高校のときにゴールボールではない部活もやっていて、放課後はその違う球技の部活の練習をしていました。ゴールボールの練習時間が短い中で、限られた時間の中でどうやってやるかを考え、朝の授業が始まる前とかに、ひたすら壁に投げるとか投げ込みをずっとしていました。

—ちなみにその違う部活とは何をされていたんですか。

—フロアバレーボールです。

—ああ。そうなんですか。

—全国大会2連覇したんですよ（笑）。

—そうなんですか。すごい。初耳です。すみません。存じ上げていなくて。

—いえいえ（笑）。

—守備の時、どこにどのようなボールが飛んでくるという判断はどのように行っているのでしょうか。ある程度読みのようなものもあるのですか。

—読みをすると逆を突かれて失点につながるリスクが高まってしまうので、音を聞いて動くというのが基本なんですけれど、その中でも遠くの音を聞いてしまうと、左利きと右利きで音の聞こえ方も全然違ってくるので、近い音を聞く、ギリギリまで引き付けてから跳ぶということになります。

—そうしますと、より瞬発力が必要になりますね。わかっているけど追いつけないということも。

—そうなんです。海外選手の速い球は、女子でも50km/hで飛んできます。

—すごい速さですね。素人にはまず取れない。

こっちなかと思ってもギリギリまで粘ってから跳ぶんですね。

—手に集められているとそっちを意識してしまって足の方を狙われるというのが失点のパターンなので、フラットで待つというのが基本になります。

—試合前のルーティンは？

—会場に行くまではイヤホンで音楽を聴いています。入場待ちのときが一番緊張するので、チームメイトとあえてしゃべったり、背中をたたいてもらったりとか。『一発お願いします』という感じで、気合を入れてもらっています（笑）。それから、この（ユニフォームの）日の丸に手を当てるのはずっとやっています。代表に選ばれたからには責任を持ってという気持ちで。

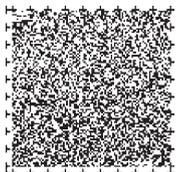


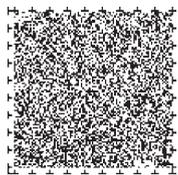
—聴いている音楽は？

—母親がファンキーモンキーベイビーズさんが好きで、私も好きです。ファンキーモンキーベイビーズさんの『明日へ』とか、リトルグリーモンスターさんの『いつかこの涙が』とか、ハジ→さんの『道。』とか。応援ソングがすごく好きで聴いています。

—食事の管理など気を付けていることは？

—実は野菜が嫌いで…（笑）。で





も、それはアスリートとしても必要なものなので食べるようにはしています。

—勝負めし（好きな食べ物）は？

生姜焼きと焼うどんが好きです。

—豚肉系ですね。

そうですね。焼うどんにはちゃんと野菜も入ります（笑）。

—パラリンピック直後は早々に理療教育課程のテストがあったと伺いました。

パラリンピックは多くても1日1試合なので、始まる前は、少しは勉強もできるのかなと思っていたんですけど、大会が始まってみると全然できなくて、ミーティングとかアップとかやっぱり緊張しているし頭に入ってこなかったです。7月の後半からずっと赤羽の代表合宿に参加させてもらっていて、合間を縫って勉強はしていたんですけど、でもやっぱり圧倒的にみんなよりも勉強時間は確保できなくて…。9月5日にパラ閉会式があって6日から学校に来させていただいたんですけど、7日からテストで、時間がない中で、本当にクラスメイトとか同じ学年の子たちがすごい教えてくれて。放課後とか勉強を付き合ってくれたりとか『ひたすら知識として叩き込む。理解しようとしちゃダメだ。』とかアドバイスをしてくれて（笑）。もう覚えるしかないと思ってやりました。

—お友達にも感謝ですね。

そうですね。感謝してもしきれないです。

—リラックスできるのはどんなときですか。

最近は行けていませんが、友達とご飯に行くのが好きです。しゃべるのが好きなので、電話とかで話を聞いてもらったりだとか。あとお風呂で音楽を聴くのも好きです。スピーカーを持って行って。うるさいと思いますけれど（笑）。

—メダルを取られてご自身への

ご褒美は？

試験も終わったし、メダルも取れパラも終わったということで、ずっと何もない週末っていうのがなかったので、直後の週末は外に一步も出ずに、ひたすら寝ました（笑）。

—国リハでの一番の思い出は？

コロナの影響などもあって学校行事は全然参加できてなくて…。1年生の体育祭も雨天中止でしたし。クラスメイトに年齢層の近い女の子がいて、気持ち的にもすごく支えてもらったと思います。いてくれたおかげで3年間ここまで来られたなと思います。

—同世代の気持ち分かり合える、気兼ねなくお話ができる人というのはいいですよね。

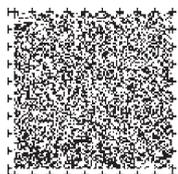
そうですね。どうでもいい他愛もない話ができたり。周りの方々からすると、多分ウチらうるさいと思います（笑）。

—最後に今後の目標・抱負をお聴かせください。

金メダルを目指していた中で銅メダルに終わってしまったので、全然納得できていない部分もあるので、もちろん3年後のパリに向けて頑張っていきたいですし、まずは国試があるので、そこはしっかり3つ取って、いい形で卒業したいなと思っています。

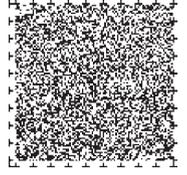
終始笑顔でインタビューに応じてくださった萩原選手。言葉や振る舞いから、非常に謙虚で気さくで、とても素敵な方だなと感じました。

国リハでゴールボールを指導してきた江黒コーチは「このパラリンピック大会を通じて大きく成長した」と言います。アスリートとしてもひとりの人間としても大きく成長されたのではないのでしょうか。今後のますますのご活躍が楽しみです。萩原選手ありがとうございました。



# 装具開発を通した聖火ランナーへの歩行支援

研究所 運動機能系障害研究部 神経筋機能障害研究室長 河島 則天



東京2020オリンピック・パラリンピックは、コロナウイルス情勢により1年延期にて今夏の開催となった。オリンピックでは歴代最多の金メダル獲得、パラリンピックでは50個のメダルを獲得し、車いすバスケットボール競技で男子が夏季団体種目で初となる銀メダルを獲得するなど、大きな躍進を遂げた大会であった。

開催そのものの是非が問われる中で、選手や大会関係者にも多くの困難や葛藤があったものと想像されるが、同大会を目指して努力や準備を重ねてきた選手や関係者にとってはかけがえないイベントとなっただろうし、観衆にとってもオリパラというイベントならではの新しい価値観の共有をもたらす機会になったのではないだろうか。

## 1 聖火リレー参加ランナーへの支援

障害当事者のオリパラへの参加の場は、パラリンピック競技だけでなく、聖火リレーが主要イベントとして位置付けられている。聖火リレーには、車いすや義肢装具装着での参加を果たしたランナーが数多く含まれ、歴代大会の中でも障害当事者の参加が多いイベントとなったのは、特筆すべき成果と言えるだろう。

我々にとっても今回の聖火リレーは大きな意味合いを持っており、これまで開発を進めてきた脊髄完全損傷者用長下肢装具C-FREX (Carbon-Fiber Reinforced Exoskeleton) の実用型モデルでの歩行を実現するキーイベントとして位置づけ、聖火リレー実施までの完成を目指して開発を進めてきた。C-FREXは、カーボン素材の特性を生かした構造を特徴とし、動力を使うことなく麻痺下肢の膝関節運動を行える機能を実装している。加えて、歩行障害者に『歩きたい』『使ってみたい』と感じさせるデザインを含ませることを意識している。装具開発にあたっては、河島が機能原理の考案と仕様策定を行い、義手や車いすなどの設計を手掛けてきたデザイナーの小西哲哉 (exiii design株式会社) との連携のもと、カーボン素材の高い製造・加工技術を保有する株式会社UCHIDAの手によって製作を進めている。C-FREX開発のテストパイロットである高橋和廣が聖火リレーランナーとして参加することが決まったことを受けて、クラッチ操作を要する装具歩行の特性を考慮した体幹装着型アタッチメントによって上肢での支持なしにトーチを掲げられる形を模索した。

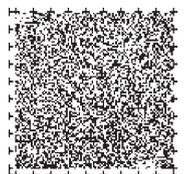
① カーボン特性を活かした設計による軽量化・耐久性向上  
軽量/高強度の炭素繊維強化繊維 (CFRP) の特性と UCHIDAの保有技術を生かした設計・製造プロセス  
膝・肘の活用による効果：歩行時の膝・肘関節の負担軽減  
軽量化による効果：動作の平準化、装着の快適性向上

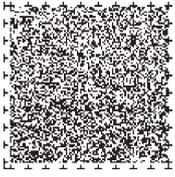
② 駆動力による正常歩行に近い円滑な関節運動を実現  
動力を用いることなく円滑な関節運動を実現  
動力を用いることなく円滑な関節運動を実現  
動力を用いることなく円滑な関節運動を実現

③ 「使ってみたい/歩きたい」と思わせるデザインの実現  
洗練されたデザインと新たなライフスタイルの提案による「歩きたい/使ってみたい」願望に対する機能的・心理的両方での充足を目指す

Designed by Tetsuya Komichi / exiii design Inc.

高橋和廣が聖火リレーで使用したカーボン長下肢装具C-FREX (Carbon-Fiber Reinforced Exoskeleton)

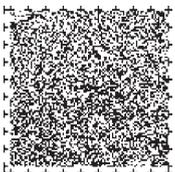




当研究室での試着テストの際に撮影（左から、デザイン担当の小西哲哉、聖火リレーランナーの高橋和廣、筆者）

2020年7月時点でも十分に歩行を実現できる機能を備えていたものの、『無動力で膝関節の動作を行う』という目標を十分に実現できていなかったため、1年の延期期間内に改良試作を進め、試作と評価を幾度も繰り返しながら準備を進めることとした。

聖火リレーは当初の公道での200m距離の歩行が中止となり、イベント会場での5mの歩行実施に変更となったが、ライブストリーミング映像によって多くの人の目に触れる機会が得られたことから、当初の目標を達成できたと言える。尚、聖火リレーで障害当事者が装具等を用いて歩く場合には補助者が付くことが一応の原則とされるが、高橋氏の装具歩行は年スパンの継続により習熟していることから私は補助につくことはせず、観覧席で彼のご家族と一緒に聖火リレーの様子を見守ることにした。高橋氏にとっては、お子さんに歩く姿を見せる良い機会となり、本人からは『オリンピックの聖火リレ



ーに装具を装着して参加できたことは、パラ競技を引退した後の大きな次のステップになった』との感想が聞かれた。

## 2 研究成果のアウトリーチ

研究開発、ものづくりは、仮説立案から試作、安全性検証を経て、臨床研究としての試用評価、エビデンス構築を経て、初めて医療現場や障害者の実使用に至る、長い道のりが必要である。研究としての取り組みでは、試作した装具を用いた歩行中の動作は筋活動の計測を行うことで身体への影響を検証し、医科学的エビデンスを得ることに重点を置く。他方、開発装具が完成へと近づいていけば、実用化へと展開するために、成果のアウトリーチとして、ユーザー対象となる歩行障害者の目にとまる場を得るなどの発信を行う必要がある。

聖火リレーは成果発信のイベントとして非常に良い契機となり、開発装具の価値や今後の課題を再認識するまたとない機会となった。今後は引き続き最終試作を進め、実用化へと展開していく予定である。

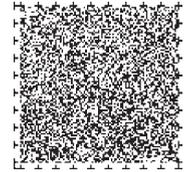
補足：C-FREXのデモンストレーション映像  
<https://www.youtube.com/watch?v=5fXuxq8kwCA>



聖火リレー本番でのC-FREXによる装具歩行の様子

## 学生支援室における感染予防の取り組み

学院学生支援室



学院学生支援室は、学生の心身の健康及び事務手続き等の支援を行うことを目的に平成30年度に設置されました。室長は学院長、室員は心理士（師）と看護師（いずれも教官併任）、事務室職員で構成されています。今回は、昨年度からの新型コロナウイルス感染症への感染予防及び健康管理に関連した学生支援室の取り組みについて紹介します。

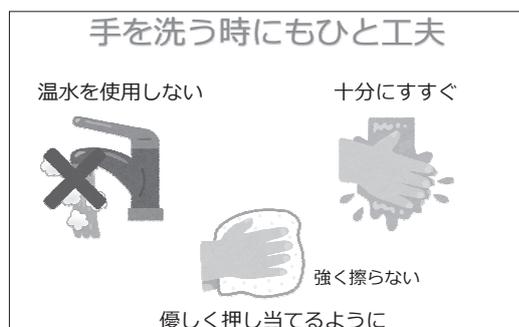
令和2年前期：学生は、4月からおよそ1か月半の間登校自粛となったため、自宅で視聴できるように、新型コロナウイルス感染症の基礎的な知識と手洗いやマスク着用の方法について動画を作成し配信しました。登校再開となった5月から6月にかけて、新型コロナウイルス感染症への感染予防に関して主に学校生活で気を付けたいことについての講義を行いました。看護師からは新型コロナウイルス感染症の基礎的な知識に加えて手洗いチェッカーを使用した手洗いの練習を、心理士（師）からは、新型コロナウイルス感染症がもたらす不安や恐怖、偏見や差別をなくすために、正しい知識を共通理解することの重要性の講義を行いました。その時点での感染状況や学科の人数などに合わせて、対面や遠隔・動画による配信など講義形態も変えていきました。

令和2年後期：冬の感染予防として、手荒れ

を予防しながら手洗いをする方法や、寒い時期の室内の換気の方法について、動画を作成し学生に配信しました。また、年末年始の休暇の前に、人が集まる際に増える感染のリスクと注意点についてのポスターを学院内に掲示しました。

令和3年前期：感染予防の基礎知識はある程度浸透してきましたので、学科のニーズに合わせた感染予防の講義を行いました。4月から環境が変わった新入生に対しては「学院内で特に気を付けること」を中心にした講義や、手洗いだけでなく生活リズムや食生活を整える必要性も含めた「新生活での感染予防」の講義などです。

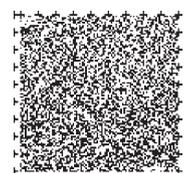
対面で講義をすると、質問も多く受けます。メディアなどで多くの情報が飛び交うなかで、学生も不安や戸惑うことも多いのではないかと感じます。また、アルコール消毒液を使用した手指消毒の練習では、適切な量をすり込んでいなかったり、乾燥するまですり込む必要があることを知らない学生も多く、感染予防を周知するためには、一度説明したから終わりではなく、繰り返しの説明が必要と感じています。まだしばらくは、新型コロナウイルス感染症の影響は続きそうですので、今後も感染状況と学生のニーズに合わせた対応を行っていきたくと考えています。



手荒れを予防しながら手洗いをする方法



アルコール消毒液を使用した手指消毒の方法  
(図はいずれも講義資料より)



障害児の成長と発達を促す住環境整備に関する研究

## 障害児の家族向け自宅内排泄環境整備 アセスメントツールの研究・開発

研究所 障害工学研究部 植田 瑞昌、東 祐二

研究所・障害工学研究部では、さまざまな工学的技術を活用して障害者のQOL向上、社会参加支援に寄与する研究・開発を行っています。専門分野も生体工学、電気・電子工学、情報・ロボット工学などさまざまであり、私は建築学を専門とし居住環境・まちづくり・生活環境全般に関する研究・開発を行っています。そこで、障害のある子どものための家族向け排泄環境整備アセスメントツールの研究・開発を行ったのでご紹介します。

### 1 障害児の排泄環境整備の意義と課題

脳性麻痺や神経難病等に起因する重度の障害のある子どもは、日常生活全般において長期的な介助を必要とする場合が多いです。また、排泄行為は生命・健康を保つために欠かせない重要な行為のひとつです。同時に、排泄動作の獲得までにはたくさんの感覚・運動・学習機能を必要とします。そのため、子どもの成長や発達を促すためにはそれらの機能を十分に発揮できる環境を整える必要があります。その他にも、介助負担の軽減を図るための環境整備も必要となります。

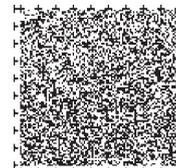
しかし、重度の障害のある子どもの排泄動作が自立するためには難易度が高く、毎日の排泄介助は家族の身体的・精神的負担が非常に大きいのが現状です。そのため、排泄機能に障害はないが児童期、青年期に至ってもおむつのみを利用する場合も少なくありません。環境を整えることでトイレにおける排泄が可能となる場合がありますが、おむつ以外の排泄方法の検討に至らない要因として、①成長期（発育・発達期）の障害児に配慮した住環境に関する整備指針がないこと、②排泄動作獲得の好期に環境を整備することに対する、家族の認識を促す情報が不

足していることなどがあげられます。また、既存の研究では、成長期にある障害児の状態に配慮した環境整備に関する研究報告がありません。

### 2 自宅内排泄環境整備アセスメントツールの開発コンセプト

子どもは毎日少しずつ成長していきます。成長と発達に大切な時期を逃してしまわないように、適切な時期に適切な環境を整える必要があります。そこで、一番近くで成長と発達を見ながら育児をしている家族が主導的に環境を整えるきっかけとなるような「気づき」と「ヒント」を得るためのアセスメントツールの開発を行ってきました。研究・開発にあたっては、障害のあるお子さんの自宅に訪問し、排泄状況と自宅内の排泄環境を把握し、さまざまな情報等をいただきました。また、アンケート調査によりアセスメントツールに関するニーズ等を把握しました。アンケートの結果やご家族のご協力をいただきながら、専門家（PT・OT・建築士）と検討を重ねました。

作成するにあたり大切にしたことは、住宅事情や家族の「カタチ」や価値観はさまざまであるから、アセスメントした結果、排泄環境整備の内容が一つにならないように工夫しました。また、トイレにおける排泄が最終目的ではなく、排泄環境を整えるプロセスも成長や発達には重要となることを理解してもらえるように考えました。さらに、排泄環境の不安解消や気づきのきっかけになるように慎重に検討し、自由閲覧をする形式よりも、むしろイベントや勉強会等を通じて、住環境や子どもの状況に合わせて具体的にイメージし、専門職への相談につながるよう配慮しました。



### 3 家族向け自宅内排泄環境整備アセスメントツールの構成

開発したアセスメントツールの対象者は、肢体不自由のある子どものいるご家族向けとし、小学校入学前に活用してもらうことを想定しています。A5サイズ32頁フルカラーの小冊子とし、タイトルは「障がいのあるお子さんのところと体に合った排泄スタイル～住まいのくふう～」としました。構成は以下の通りです。

1. はじめに排泄環境を整えるメリットや意義を解説
2. 自宅のトイレ環境を簡単に把握し、アセスメント部分として、身体機能やライフステージ、現在の排泄場所を把握する
3. 子どもに合った排泄環境整備のプランを参照する
4. 住まい全体の工夫を把握する

アセスメント部分はマトリクスとなっており、該当する箇所の周辺のプランをチェックすることで、成長と発達に合わせた対応の仕方を知る

ことができます(図1)。プランは全部で17種類とし、調査で得られたご家族の体験談やアイデア・工夫を掲載するなどイラストを多用し見やすくデザインしました。

また、排泄環境整備は入浴と同時に考える家庭や住み替えを視野に入れた住環境整備を行うことも少なくないため、住まい全体の環境を整えるポイントを示しています。

以上、今回研究・開発した家族向けのアセスメントツールについて紹介しました。当面は、イベント等を通して、専門職と一緒に活用していく予定です。障害のある子どもの状態に合わせた排泄スタイルを考えるきっかけになると嬉しいです。

調査にご協力いただいたご家族の皆様には厚く感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は、JSPS科研費JP19K23563の助成を受けて調査・研究を行いました。

お問い合わせ先：障害工学研究部(担当植田)

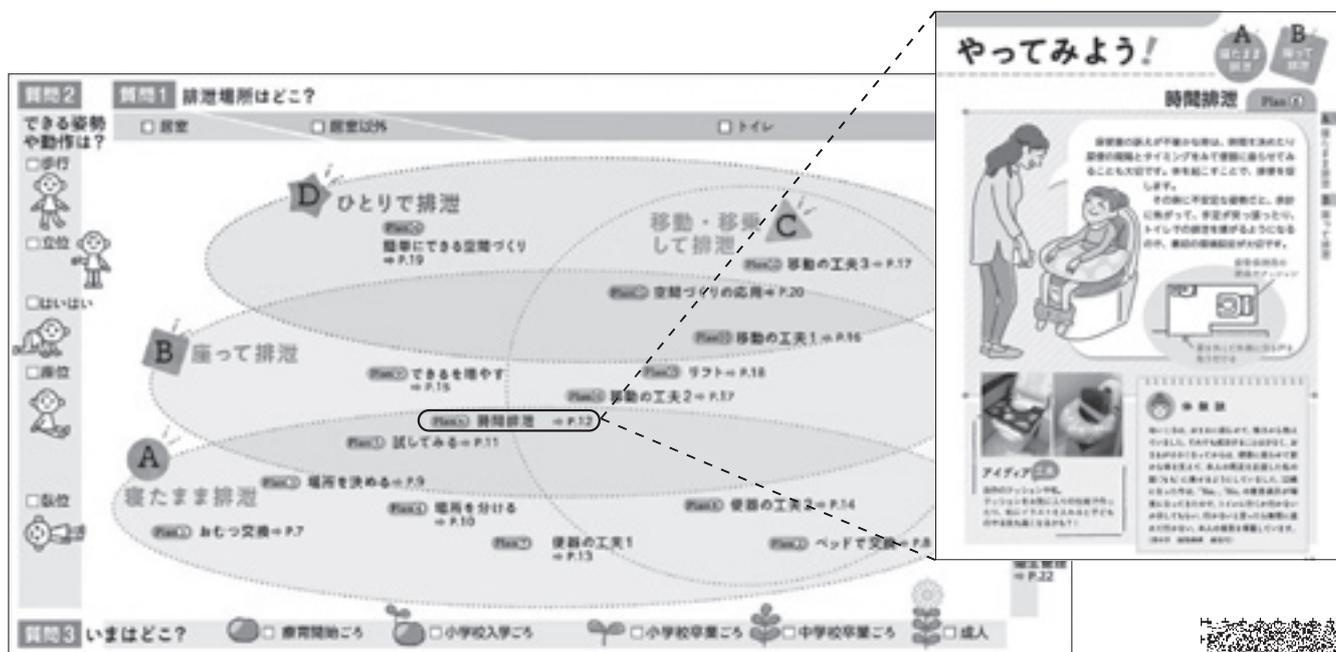
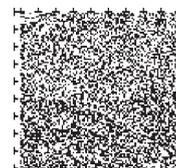
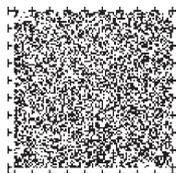


図1 アセスメント部分(左)とプラン例(右上)





## 自立支援局利用者募集

### 〈視覚障害のある方の自立した生活に向けて〉

自立訓練(機能訓練)

視覚障害により日常生活や就労等を目指す上で困っていること等がある方に対し、白杖を使用した歩行訓練や日常生活訓練、学習や就労等で活用可能な音声パソコン、録音機器等の操作方法習得のための訓練等を提供しています。

就労移行支援(養成施設)

国家資格である「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師」の資格取得を目指し、授業(講義、実技実習、臨床実習等)の提供の他、資格取得後の就労に向けた支援を提供しています。就労移行支援(養成施設)の利用に当たっては利用者選考があります。

	応募締切日 (書類必着)	利用者選考日	利用開始 年月
第1回利用者選考	2021年11月12日(金)	2021年12月9日(木)	2022年 4月
第2回利用者選考	2022年1月14日(金)	2022年2月9日(水)	
第3回利用者選考	2022年2月4日(金)	2022年3月3日(木)	

### 〈頸髄損傷等の方の自立した生活に向けて〉

自立訓練(機能訓練)

頸髄損傷等による重度の肢体不自由の方が地域や家庭、職場などで補装具や自動具の活用や環境を調整することによりできる動作を身につけ、より充実した社会生活を送ることができるよう、理学療法、作業療法、リハビリテーション体育、職能訓練等の訓練を提供しています。

### 〈高次脳機能障害のある方が自分らしく暮らすために〉

自立訓練(生活訓練)

高次脳機能障害に伴う記憶障害、注意障害、遂行機能障害等による生活課題に対し、メモリーノート等の代償手段の活用によりスケジュール管理等の生活能力を高められるよう、個々の生活状況に応じて支援します。個別又は集団で訓練を提供しています。

### 〈障害のある方の「働きたい」を支援します〉

就労移行支援

主に身体障害、高次脳機能障害、発達障害のある方に、一般就労や復職に向けて、技能習得及び模倣的な職場体験訓練を提供しています。また、職場見学や職場実習の他、履歴書の作成や面接練習なども実施し、面接会の同行等の就職活動も支援しています。

※障害状況や遠方である等の理由により、上記サービスを通所で利用することが困難な方には、施設入所支援(宿舍)を提供しています。併せてご相談ください。

お問い合わせ先

自立支援局総合相談支援部総合相談課 E-mail : rehab-soudan@mhlw.go.jp

TEL 04-2995-3100(内線2211~2215) FAX 04-2992-4525

## 学院学生及び研修生募集

学院は、1. 高校や大学を卒業した方(見込の方を含む)を対象とする専修学校であり、また、2. リハビリテーション関係・福祉関係に現に従事している方々を対象とする研修機関です。

### 1. 専修学校に設置されている学科、応募資格、養成内容は次のとおりです

学科名	修業年限	応募資格(詳しい応募資格はHPをご覧ください)	養成内容
言語聴覚学科	2年	4年制大学を卒業した方(見込の方を含む)	言語聴覚士の養成
義肢装具学科	3年	高等学校を卒業した方(見込の方を含む)	義肢装具士の養成
視覚障害学科	2年	4年制大学を卒業した方(見込の方を含む)	『見えない』『見えにくい』方々の生活を安全で円滑なものにするため、専門知識に基づく適切な助言や有効な用具の選定、訓練などの支援を行う「視覚障害者生活訓練専門職員」の養成
手話通訳学科	2年	高等学校を卒業した方(見込の方を含む)	手話通訳士の養成
リハビリテーション体育学科	2年	4年制大学を卒業した方で高校保健体育の免許を有する方等(見込の方を含む)	スポーツを用いて、障害のある方の運動機能や認知機能の維持・改善が図られるよう指導や支援をする「リハビリテーション体育専門職員」の養成
児童指導員科 (発達障害支援者養成)	1年	4年制大学を卒業した方(見込の方を含む)又は保育士資格を有する方(見込の方を含む)	発達障害児・者やそのご家族が『生きづらさ』や『育てにくさ』を感じることなく、日常生活や社会生活を営むことができるよう支援する発達障害支援専門職の養成

### 2. 現任研修については、中期研修(約半年間)と短期研修(1日~1週間程度)があります。主な中期研修の種類と応募資格は次のとおりです。

研修名	応募資格(詳しい応募資格はHPをご覧ください)
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程	看護師として実務経験5年以上の方(うち3年以上は脳血管障害の多い部署での看護実績がある方)
発達障害支援専門職研修課程	医療、教育、福祉分野において発達障害支援に携わる現職者で所属長から推薦された方

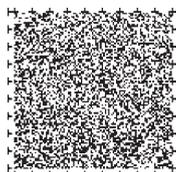
短期研修については、リハビリテーション関係・福祉関係の現職者を対象に年間約30研修開催しています。研修会名、応募資格や応募期間などはHPをご覧ください。

お問い合わせ先

各担当へ直接ご連絡ください(TEL04-2995-3100)

専修学校について(内線2611) 短期研修について(内線2612・2619)

中期研修について(脳卒中リハ:内線2618・2648、発達障害支援:内線2626)



## オープンキャンパスについて

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインによるオープンキャンパスを実施しております。詳しくは当センター学院のホームページをご確認ください。

<http://www.rehab.go.jp/College/japanese>